

何故日本語は曖昧だと思われるのか（２）

——助詞からの一考察——

Why Is it Thought Japanese Is Vague ? — An Examination of Japanese Particles —

周 国 龍*
Guo Long ZHOU

要 旨

日本語には助詞がなくても成り立つ表現があるが、そのような表現に助詞を付加することも可能である。また付加されてもよさそうに見えるが、言外の意味が含められるため、付加されたら話し手の表現意図に反する意味になり付加が適切でない表現もある。

本稿は助詞の付加の有無、付加の可否によって表現の意味は微妙に違ってくることを手掛かりに、学習者は何故日本語を曖昧だと思うのか、その原因について考察した。

日本語が曖昧だと思うのは、学習者が日本語の表現の特徴に対する理解不足、助詞の付加の有無により表現の意味の微妙な違いを正しく理解できないことが一因だと考えられる。

キーワード： 助詞 付加 表現の意味 対人関係 理解不足

1. はじめに

日本語の表現には文法形式上、そして人間関係に対する配慮の表し方等で中国語の表現と違う独特な表現の仕方がある。中国語を母語とする日本語学習者（以下学習者）にとってはこのような表現の仕方に対する理解と運用はなかなか難しく、日本語習得の難点の一つになっている。このような文法形式上の違い、人間関係に対する配慮の表し方の違い等に対する理解不足は誤解と誤用を起こす原因になり、また日本語は曖昧だと思う一因になっているのではないかと考えられる。それを解明するために、まず日本語の文法形式による表現上の特徴の考察を通してその原因を分析する必要があると考える。この考えに基づき、筆者（2009）は同じ表現において格助詞の置き換えによる表現の意味の違いについて考察してみた。格助詞は体言成分につけ、文中において述語との特定の文法的関係を示す役割を担っている。そのため、多くの場

* 本学教授、対照言語学 (Contrastive Linguistics)

合格助詞を使わずに日本語の表現を成立させるのが難しい。一方、同じ表現において格助詞の置き換えが可能で、格助詞一つ置き換えただけで表現の意味に大きな違いをもたらす場合も多々ある。日本語母語話者はそれらを意識せずに使い分けをしているであろうが、日本語のような助詞といった概念すらない学習者にとってはこのような微妙な意味の違いに対する理解は難しい。日本語の表現の意味の微妙な違いに対する理解不足は誤解と誤用を生じさせ、コミュニケーション障害をもたらし、場合によっては人間関係にまで悪影響を与える可能性がある。格助詞の置き換えによる意味の違いに対する理解不足が日本語は曖昧だと思う一因であると指摘した。

本稿は同じ立場に立って、主に格助詞の付加、格助詞と取り立て助詞との置き換え可能な表現、本来は助詞がなくても成立するが助詞の付加も可能な表現、そして一見助詞「は」の付加が文法的に可能であるが、実際は「は」の付加により話し手の意図した表現の意味と大きく変わるため、付加できない表現等を考察してみる。

以下、これらについて考察していく。

2. 格助詞の付加について

一般的に言えば、日本語の表現において格助詞は欠かせない文法的成分である。ただその一部は格助詞がなくても表現は成立できるが、格助詞の付加が可能な場合もある。付加が可能な場合において、付加の有無は文法的な問題というよりも話し手の表現意図によるものであり、当然付加の有無で両者は意味の大きく異なる表現になる。

1. 参加者は 10 人増えた。
2. 参加者は 10 人に増えた。

格助詞の付加がない 1 の場合、10 人増えたという事柄を表すが、元の人数に触れていないため増えた人数はわかるが、総数何人になったかは分からない。一方、格助詞「に」の付加があった 2 は同じく元の人数は触れておらず、何人増えたか読み取れないが、増えた結果総数 10 人になったという事はわかる。従って共に人数の増加についての表現ではあるが、増えた人数と増えた結果の人数とで表現の意味は大きく異なるわけである。

3. リンゴを二つ切った。
4. リンゴを二つに切った。

3 は切る対象の量を表す。二つのリンゴを切ったということははっきりしているが、切った後は幾つになったかは不問にしている。これに対し、4 は切った後、常識的に言えば一つのリンゴは半分ずつの二つになったという結果を表している。3 の切る対象の数と 4 の切った後の結果は意味的に大きく異なったことは明らかである。

5. 木村先生が講演をしている間、彼はメモを取り続けた。
6. 木村先生が講演をしている間に、大きな地震があった。

「に」の付加の有無によりその後続く表現の動詞は文法的な意味によって制限される。「に」の付加がない場合、後続の動詞は継続的な行為を表す動詞でなければならないのに対し、「に」の付加があれば、期間内のある時点でその行為の終了を意味する動詞が来なければならない。従って5は「取り続ける」という継続を意味する動詞、6は「あった」という瞬間的に行為を終了する意味の動詞が来るわけである。

「間」に「に」の付加の有無で後続の表現に文法的な意味が制限され意味に影響を与える場合がある。

その影響を受け、はっきりと継続動詞とも瞬間動詞とも言いきれないような動詞の過去形は「～間」にも、「～間に」にも後続することができる。

7. 彼が出かけている間、私は宿題をした。

8. 彼が出かけている間に、私は宿題をした。

「に」の付加なしの7は継続的な行為の表現が必要になるため、「宿題をした」行為は出かける状態が続く最終時点まで継続するという意味になる。出かける状態の最終時点において宿題をする行為が継続するのだから、最終時点になっても宿題を完了したとは読み取れないわけである。これに対し、「間に」は出かけている状態が継続した間のある時点を範囲として終了することになるため、宿題を完了したという意味が読み取れやすくなるわけである。7、8のように、「に」の有無は後続の表現の意味にも影響を与え、両者の意味は大きく異なってしまうわけである。

このように、格助詞「に」の付加の有無により、後続の表現に継続動詞が来るかそれとも瞬間動詞が来るかが制限される。また「に」の付加の有無による文法的な意味の制限を受け、表現の意味が大きく異なってくる可能性もあるわけである。

以上は格助詞「に」の用法の一部ではあるが、この類の例を見ればわかるように、学習者にとっては簡単に理解できるような文法事項であるとは言えず、このような表現において誤解と誤用が起きることも容易に想像されよう。

9. この小説を30分読んだ。

10. この小説を30分で読んだ。

格助詞「に」と同じく格助詞「で」の付加の有無は表現の意味に影響を与える場合がある。「で」の付加がない場合、時間内に行為が継続したという意味を表す。「で」の付加により、動詞の過去形に時間内で完了の意味を持たせる。だから、9では「読む」行為は30分間継続したと強調しただけで、小説は読み終わった可能性は皆無に近い。これに対し、「で」の付加により、時間内に行為の終了が強調されたため、30分間読んだ結果、小説を読み終わったという意味になるわけである。このように、同じ30分間読んだことではあるが、ただ30分間読んだだけのと、30分間読んだ結果、小説は読み終わったという意味を含有するのとでは表現の意味が明らかに大きく異なったわけである。

11. 10分化粧をする。

12. 10分で化粧をする。

「で」によって時間内に行為の終了が強調されたため、話し手は短時間で化粧をすませるからあまり待たせないよという聞き手に配慮の意味も含まれる表現になる。格助詞「で」によって相手配慮といった含みのある表現になれば、表現の事柄の意味の違いに対して正しく理解できるかどうかという域を越えて対人関係にも影響を及ぼす表現になるのである。格助詞「で」の使い方は日本語を勉強し始めたころから習得を進めているとはいえ、付加の有無で表現の意味にこれだけ大きく影響することも有り得るから、習得の難しい文法事項の一つであることは明らかであろう。学習者のこれらに対する理解不足で誤解と誤用を起こす可能性は大いにあると考えられるわけである。

以上のように、格助詞の付加の有無はただ表現の事柄を理解するレベルの問題でもあり、場合によっては対人配慮のレベルの問題でもある。母語の文法体系に格助詞が存在しない学習者にとっては文法体系上に格助詞が存在する日本語を勉強するに際して、格助詞の文法的な意味を理解するのも難しいが、その上に対人関係にも影響を及ぼすということになれば、尚更難しいと言わざるを得ないであろう。

3. 格助詞と取り立て助詞との置き換えについて

本章は格助詞と取り立て助詞との置き換えにより、表現の意味にどのような変化が起きるかについて考察してみる。

格助詞の付加の有無で主に表現の事柄に関する意味の違いが起きるといふならば、格助詞と取り立て助詞との置き換えは事柄に関する意味の違いというよりも主に話し手の気持ちが表現に入るか否かの違いだと言えよう。取り立て助詞は話し手の気持ちを表すため、人間関係に影響をもたらす可能性が高い。人間関係に悪影響を与えないように、表現の事柄に関する意味を正しく理解するだけでなく、表現に込められている話し手の気持ちも正しく汲み取らなければならない。

13. あの先生は考えなくてもいいことを考えて悩むタイプだ。

14. あの先生は考えなくてもいいことまで考えて悩むタイプだ。

格助詞「を」は事柄について述べるのが主な役割であり、話し手の事柄に対する自分の気持ちは殆ど伝わってこない。一方、取り立て助詞「まで」になると、やむなく「考えて悩む」ならばそれは仕方がないであろうが、考えて悩む必要もないのに考えて悩むのは考え過ぎだという話し手の気持ちも同時に伝えられる。

15. 彼は多額の借金があるので、日曜日に働かなければならない。

16. 彼は多額の借金があるので、日曜日まで働かなければならない。

15の「に」はどちらかというと、事実として日曜日に働いていて、他の曜日には特に言及し

ていないので、借金の大変さはそれ程伝わってこないが、それに比べて 16 の「まで」では平日は勿論働いているが、休日で休んでもいい土曜日だけでなく、日曜日も働かなければならぬから大変な借金だと話し手の気持ちも同時に伝えられるわけである。

17. 空港に彼を迎えに行った。

18. 空港まで彼を迎えに行った。

「に」では事柄を伝えるだけであるが、「まで」になると、もう少し時間的、労力的に楽な地点で迎える選択肢もあろうが、空港まで迎えるのだから、話し手が心を尽くしたという気持ちが込められている表現になる。逆に、迎えてもらった方から言えば、

19. 空港に迎えに来ていただき、ありがとうございました。

20. 空港まで迎えに来ていただき、ありがとうございました。

「に」は空港に迎えに来てくれることを事実通りに淡々と述べて儀礼的に感謝しているように聞こえ、ありがたみは話し手の表現からはそれ程感じ取れない。一方、「まで」の方がいろいろ選択のある中、より楽な迎える方法もあると考えられるのに、わざわざ時間と労力等をかけて迎えに来てくれた心尽くしの対応だと認識しているのを表明しつつ、ありがたい気持ちを込めた感謝の表現になると言えよう。

表現における格助詞は名詞につき、主に文法的な役割を果たすのに対して、取り立て助詞は表現に含みを持たせて主に話し手の心情、考えなどの気持ちを表すのに用いられる。だから、格助詞を置き換えて取り立て助詞を使うのは表現の事柄の意味が異なってくるというよりも、同時に話し手の気持ちも込められる表現になる。従って、取り立て助詞に置き換えられる場合において、表現に含められる話し手の気持ちを正確に汲み取る必要があるし、正確に使えるように心がけなければならないであろう。誤解と誤用が起きたら、人間関係まで悪影響を与える可能性が高いと言わなければならない。

4. 取り立て助詞の付加について

日本語には取り立て助詞がなくても成立するが、取り立て助詞の付加が可能な表現もある。取り立て助詞の付加により、話し手の気持ちも込められる表現になる。付加の有無で表現の意味は大きく異なる。

21. 参加者は 10 人増えた。

22. 参加者は 10 人も増えた。

取り立て助詞が付加されない 21 の場合、10 人増えたという事柄を表すだけで、話し手の気持ちは含められていない。22 は 21 と同じ事柄を表しているが、「も」の付加によって話し手の意外だ等といった気持ちも同時に表れている。従って、事柄のみを表す 21 と違って 22 は事柄を表すと同時に話し手の意外な気持ちも表しているわけである。

23. 一万円持っている。

24. 一万円も持っている。

「一万円持っている」はただ一万円を持っている事実を伝えるだけだが、「も」の付加により、話し手の意外だといった気持ちが込められることになる。このように助詞の付加の有無により、表現に話し手の気持ちが込められるかどうかという点において意味の大きな違いが見られるのである。

25. 彼は親友に裏切られて、すっかり人を信用しなくなった。

26. 彼は親友にまで裏切られて、すっかり人を信用しなくなった。

25 では事柄が伝えられるが、話し手の気持ちは殆ど読み取れない。26 で「まで」が付加されると、25 と同じ事柄が伝えられる上に、普通の友達関係以上の親友にも裏切られたことは酷過ぎる、人を信用しなくなるのも無理ないといった話し手が同情を寄せる気持ちも伝わってくるであろう。

27. A：土曜日と日曜日とどちらが都合がいいですか

B1：どちらもいいです。

B2：どちらでもいいです。

28. A：あなたはスポーツをするのと見るのとどちらが好きですか。

B1：どちらも好きです。

B2：どちらも好きです。

都合を聞かれた場合、「どちらもいいです」「どちらでもいいです」の両方が回答可能であろうが、「好きか」と聞かれた場合になると、「どちらも好きです」と答えるのが普通で、「どちらも好きです」とは言えない。27のように、「も」と「でも」の両方とも使える場合もあるし、28のように、「も」しか使えない場合もある。しかし、どのような場面で「も」を、どのような場面で「でも」を使わなければならないのか、「も」と「でも」でどこが違って来るかを明らかにする必要があるだろう。

27 では土曜日と日曜日で「どちらがいいか」と「都合」を聞かれた場合において「も」は積極的で土曜も日曜も両方とも肯定的な回答になるが、「でも」なら両方とも肯定的ではあるが、「できれば土曜日（或いは日曜日）がいいのだが」といった妥協の意思が伺える。このように妥協、譲歩の可能性のある回答ができる場合において、意味は異なるが「も」と「でも」がどちらも使える。しかし、28 では自分の趣味を聞かれただけなので相手に妥協、譲歩をしたりする必要はないため、「でも」は使えないわけである。これは次のような例でも同じことが言えよう。

29. サッポロビールもいいです。

30. サッポロビールでもいいです。

例えばキリンとサッポロの両方があって、どちらにするかと聞かれた時に、「も」ならキリンもいいし、サッポロもいいという両方とも肯定的であろうから、妥協の意味は感じられない。

一方、「でも」なら本当はキリンが飲みたいのだが、譲歩してもよいよという意味を感じさせる表現になる。これは通常「キリンを切らしているが、サッポロでもよろしいですか」といった店員の質問に対する客の返事である。この二例を見てわかるように、場面なしでは一見両方とも表現として問題なく成立するのだが、妥協する意味を含有するか否かで大きく違うのである。このような違いがあるから、それぞれの使用は場面を考慮に入れば制限がかかる。即ち、この類の表現は場面を考慮に入れて場面に即した表現の使い分けをしなければならないわけである。学習者にとっては場面によって表現を使い分けしなければならないし、表現からどのような場面かを想像することができなければ、誤解と誤用につながる難しい文法事項なのである。それにしても、以上のような場面ならば、たとえ誤解や誤用があったとしても特に失礼になることはまずないであろう。しかし、次のような場合は失礼にあたり、人間関係にまで悪影響を与える可能性が出てくるであろう。

31. (企業のテニスコート前の看板)「一般の方でもご利用いただけます」

を見かけた場合、感じを悪くさせられることになるであろう。なぜなら、言わんとするところは「本来は一般の人は使えないのですよ」、何かの事情でそうせざるを得なくいやいやながら開放するという意味が読み取れるからである。しかし、これは「一般の方もご利用いただけます。」即ち「でも」を「も」にするだけで、「企業の人も、一般の方も」差別なく利用できるという意味になるので、気分よく利用できるであろう。こう見てくると、「も」と「でも」は表現の意味に大きな違いをもたらすだけでなく、同じ譲歩でも場合によっては失礼になってしまうから、場面を考慮に入れて使い分けをしなければならないのである。

取り立て助詞の付加は表現の意味に大きく影響し、人間関係に影響することもありうるから、その使用は場面を考慮に入れて使い分けをする必要があるし、場面を考慮に入れて正しく理解しなければならない。学習者にとっては表現のこのような微妙な意味の違いを習得するのがそう簡単なものではないであろう。

5. 「は」の付加の可否について

「は」は場面、文脈によりその使い方、意味がいろいろあり、それぞれ異なるため、「は」の理解と使用は大変難しい。

32. 身分証明書をお示してください。

33. 定期券をはっきりお見せ下さい。

34. 定期券をはっきりお見せ下さい。

出入りに身分証明書の提示が必要な施設において、32のような掲示に「を」を「は」に変えることはできない。その理由は身分証明書以外の提示でもよいということは考えられないからである。しかし、自動改札機がない時代では定期券の方は定期券を、定期券でない方は切符の改札をすることになるから、言外の意味が含められる「は」を用いることもできることになる。

このように、言外の暗示が可能な 33 では「は」を用いることは可能であろうが、言外の暗示が考えられない 32 では「は」を用いることは不可能になる。このような例から見てわかるように、言外の暗示の「は」の使用の可否は表現の場面、文脈などに制限されるのである。

次のような例は文法的には「は」の付加は可能であるが、付加により、言外の暗示、比較等の意味が加えられるため、場面、文脈によっては「は」の付加ができない。例えば、

35. 今日早いですね。

36. 今日は早いですね。

挨拶として使われる場合、通常「は」の付加はできない。もし、うっかり「は」を付加したら暗に今まではいつも遅く今日は珍しく早いといった皮肉ともとれる意味が言外に加えられるため、反感を買って挨拶のつもりが逆効果になり、相手との関係を悪くしてしまう恐れがある。だから、ただ挨拶をするような場合において「は」の付加は適切ではないわけである。

37. メールありがとうございます。

38. メールはありがとうございます。

「メールをいただき、ありがとうございます。」を省略した形は「メールありがとうございました」になったと考えられる。「は」を付加すれば、言外の意味を暗示することになり、「メールをくれることについては感謝しますが、その内容は…」等という言外の意味を連想させかねないため、「は」の付加は難しい。これは次のような例も同じである。

39. お電話ありがとうございます。

40. お申込みありがとうございます。

このように、短縮した挨拶の場合に、「は」の付加は制限されている。

41. 次、止まります。

これはバスの車内放送である。これもまた「は」の付加はできないようである。一方、近鉄急行電車の車内放送は「次は四日市です、四日市の次は富田に止まります」と「次は」になっている。何故、バスは「次は〇〇バス停に止まります」と言えないであろうか。電車は決まった駅に止まるのに対し、バスはボタンを押さないと止まらない可能性があるからである。「は」の付加により、次の駅は止まると明言したと同時に、止まった駅の次の駅は止まらなると暗示しているように聞こえ、他の乗客に要らぬ心配をさせてしまう可能性があるから、バスの場合において「は」の付加はできないのである。

このように、「は」は色々な表現において付加可能と見えるが、暗示、比較等言外の意味を有するため、場面、文脈によっては付加することは許されない表現もある。学習者にとって、「は」の使い方の習得は恐らく最も頭を悩ます難しい助詞であろう。

6. 終わりに

一般的に言えば日本語の表現において体言成分に格助詞は必要不可欠な成分であるが、体言

成分に格助詞がなくても成立するといった表現も存在する。このような表現において、体言成分に格助詞を付加することもできるが、格助詞付加の有無により表現の意味は大きく異なる。格助詞は主に表現の文法的関係を示し、表現の事柄を表すのに必要であるのに対し、取り立て助詞は主に表現に暗示、比較、意外等の意味を持たせ、話し手の考え方、気持ちを表すのに使われる。このため、表現に取り立て助詞が用いられる場合は主として話し手の気持ちを表す。取り立て助詞の使い方次第で、人間関係に大きく影響する可能性が生じる。また助詞の中で、「は」に暗示、比較等の言外の意味があるため、文脈、場面によってはその使用は制限される。

格助詞の付加は主に事柄に関する表現の意味の変化をもたらすのに対し、取り立て助詞の使用、「は」の付加は表現に暗示など言外の意味が加わったり、話し手の気持ちが込められたりすることで、人間関係に影響を与える可能性もあるわけである。

表現の事柄に関する意味と表現に込められた話し手の気持ちを同時に正しく理解することができなければ、当然表現を完全に理解したとは言えない。特に話し手の伝えたい気持ちを正しく理解できなければコミュニケーションはうまくできなくなり、人間関係にまで影響を与える可能性も高くなる。学習者はこのような表現の微妙な意味の違いを正確に理解できず、また使い分けができなければ誤解と誤用を起こしてしまう。これは学習者が日本語の助詞の使い方と意味に対する理解不足に起因すると考えられる。しかし、学習者は自分自身が表現に対する理解不足、ここでは助詞の使い方と意味に対する理解不足に起因することに気付かずに、日本語の表現は何故助詞一つぐらいの違いでこれだけ意味が異なるのか不思議に思った結果、日本語は曖昧な言語だと認識するに至ったのであろう。本稿で考察したように、学習者の日本語の助詞の付加の有無、付加の可否による表現の微妙な意味の違いに対する理解不足は日本語が曖昧だと思ふ一因なのである。

注1：例文の多くは参考文献や日本語教育関係のサイトから引用した。詳細は略す。

参考文献

- 庵 功雄 2001 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』 スリーエーネットワーク
庵 功雄他 2001 『日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
氏家洋子 1996 『言語文化学の視点』 おうふう
北川千里 平成9年 外国人のための日本語例文・問題シリーズ『助詞』 荒竹出版
周国龍 2009 「何故日本語は曖昧だと思われるのか」 鈴鹿国際大学紀要 No. 16
芳賀綏他 2006 『あいまい語辞典』 東京堂出版
益岡隆志 2008 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』 くろしお出版